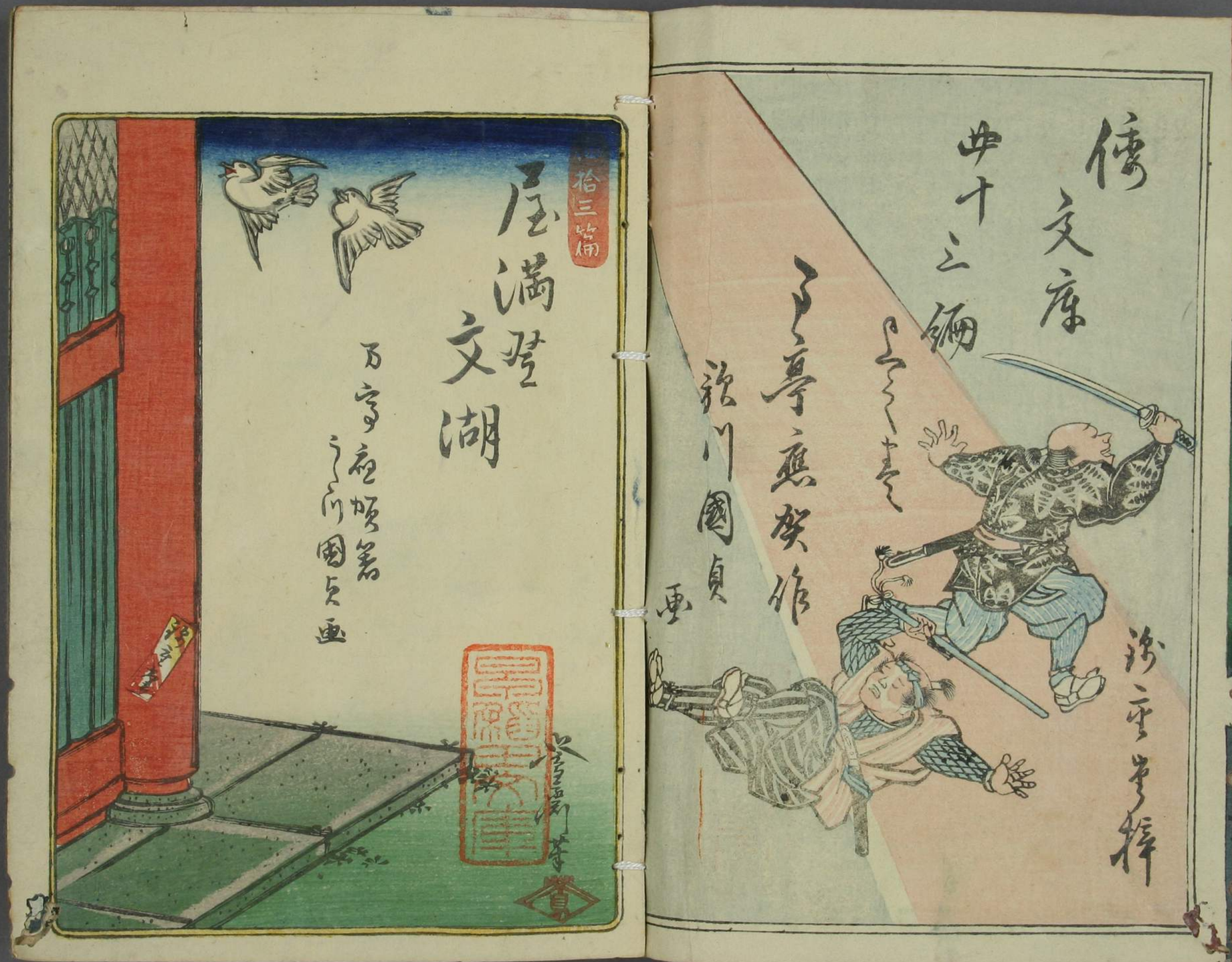
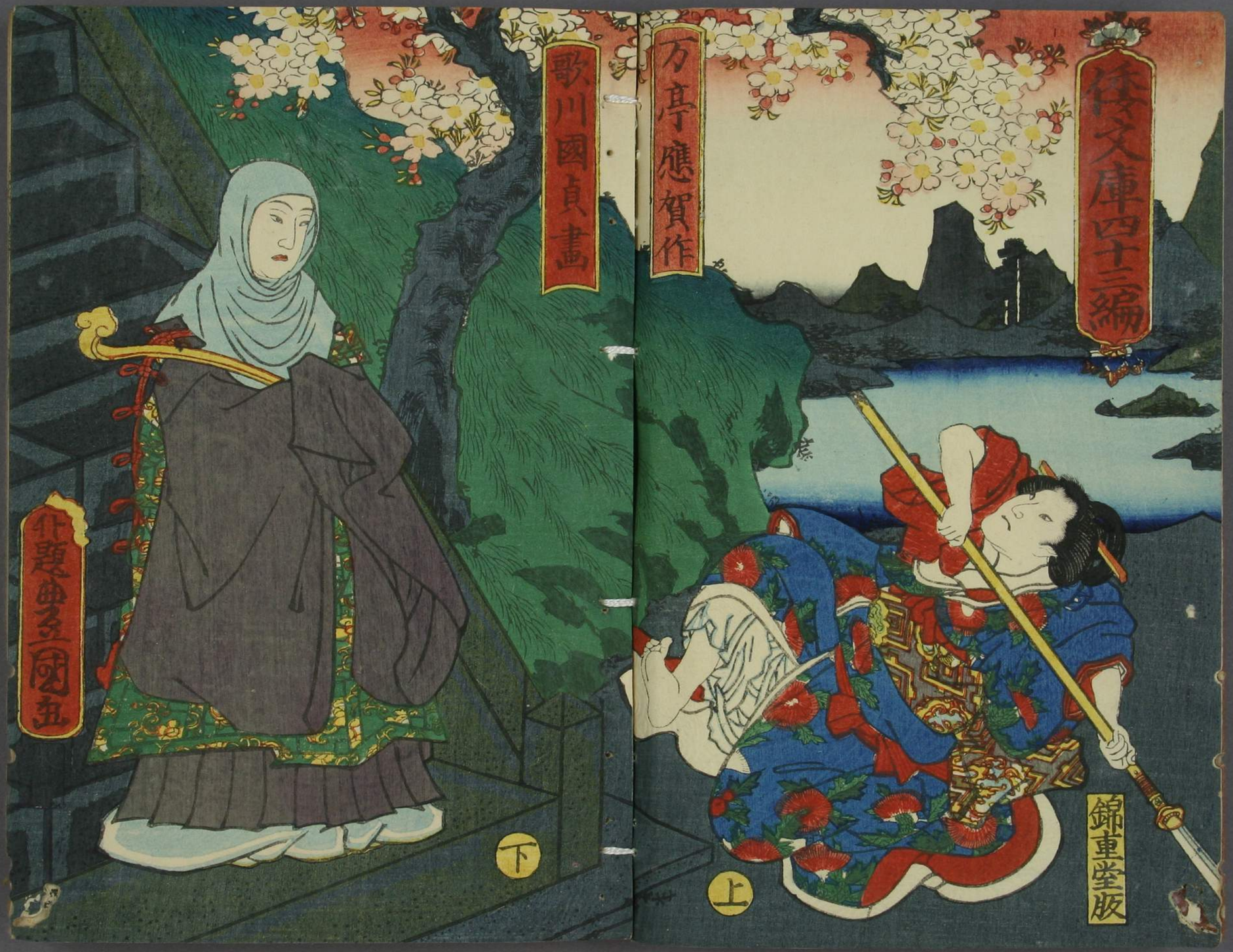
屋陽物全

へ13
2944
15

へ13
2944
15

昭和九年
七月九日
購求


傳
文庫
世十二編
拾三篇
屋満登
文湖
万字亭應賀作
歌川國貞
画


俤文庫四十三編
万亭應賀作
歌川國貞畫
什題曲亭團五
錦重堂版
上
下

釋迦八相倭文庫四拾三編叙

淨土三部經内觀無量壽經ハ摩伽陀國王舍城の頻婆
娑羅王又瓶沙王とも云の太子阿闍世又衆樂提婆達多又調達の勸ふ
仍て父王を七重の牢獄ふ幽閉ゑて乾殺ー奉らんとする
說を原とせり是信ふ無上の惡逆なれどもそハ惡と以て惡て
懲し善を以て善を勸むるハ都て教書の深意なり然ハ幾
等を能勘弁て人道の專一とする父子の道ふ違ゑ

肖安政己未夏脫稿
仝　庚申陽春發市

万亨應賀識

せゝん
きゆうぶんを
舍利弗
目連

世尊忉利天正寺に
おゐて轎曇弥をゝ
優陀夷その夕仙洞
の上腊達ゐ
戒を授け
うだいゆつ
うだいの女房

いだけ夫人

阿闍世
悪王頻婆
娑羅王を七重の
牢獄に閉居
せしむ本文豫め
観無量壽経の

びんそまら王

要を摘む

獄舎の守頭
貪官

つぎ　そのうへ
まさごひとつよ
けものをそのあ
ものろあ
ものろふでちく
れてゆきさき
このところい
ちのふるさと
るまぶきさうく
きむらうち
たいみまろう
わうれんある
のものふのうれも
るくいね田とうぐ
ものそのあるる
うひわりくせそん
このみやまふきさくせ
ゆひてようさんけものめくあきるどうふ
ひとひどころふのぞまれりうついふそのこ
ことのまつけさか
ゆくようきさうく
やどやとい
ありそぞれど
もりいかそのあ
ぎのまりひ

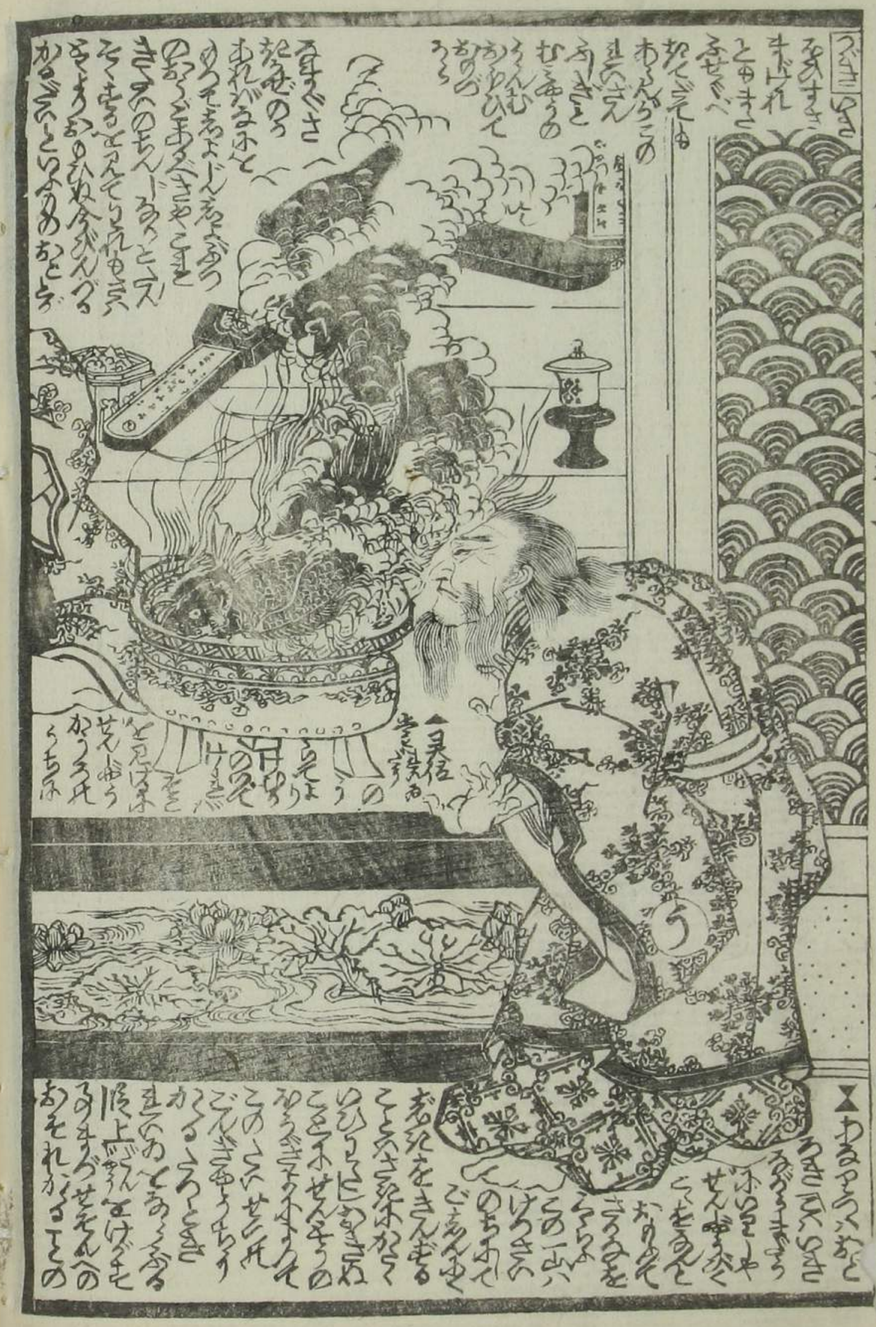
あ

あるり河那律
天眼通を
もつて世界の
ありさま成る

まきびなを
もつてあのすぎのる
百三百ばあのそふ
ぞんこころをも
くあびとつふさ
ふんさこそいさた
よきすのすぎう
そのたいとくりいま
ぎくまそふとくりいま
いまかうぐ
そうぐまといかり
さべかりすぞうだの
まんの

ちかやう
ぞんちよ
ぞのいたの
せそたの

そいとるりて
らんのうちまり
あんまりせそふ
ふるおしてをあん
らとれうんやとまめ
けまびんつぶいそい
ものうりれくいとろまり



つぎのへ

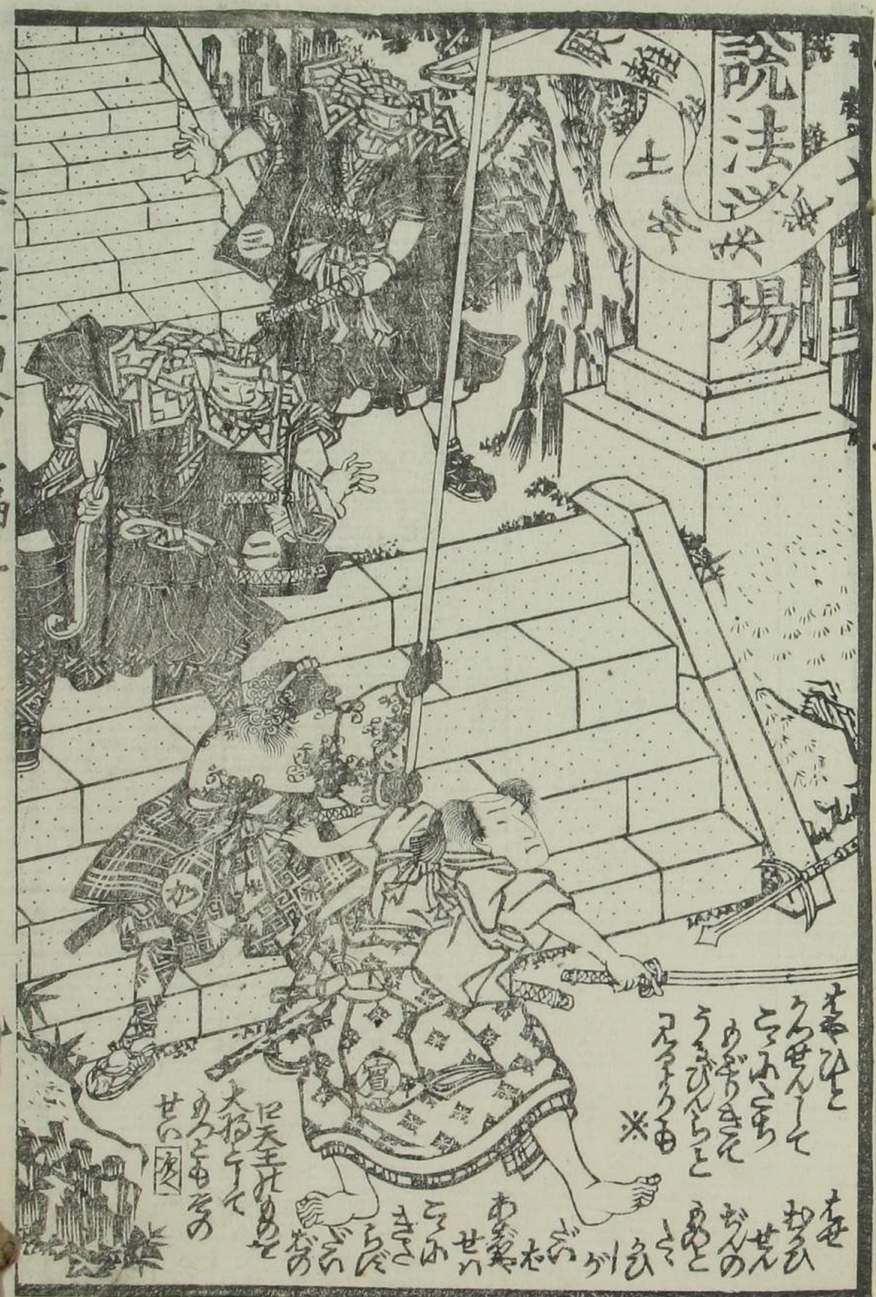
ふさりそれから
つけて〳〵これを
きまくさりや
せきんとふ〳〵

▲されさきへ
これとのもれ
わづかより
さりそくさう
ときろまで
くさらと
きまふ
るん
のあり

千だいの
みぎふ
まづ
そのあされ
ちあわせさぞことはしかひふ
うたへこ十六のとしこそ
めつことりんの▲ずゆく

べれぞシテイまくつやちやおうぎよく
とおのうをふ〳〵よう　ちやたくが
さりふる〳〵さらりうぞとゆへとのぞや
うさえやむくいやのといひすずぜんせいふ
てるぐり〳〵おちてこのよぞ川がでるふおちろう
いらまんさえいそくれよふかり
すんでもかでもいへいのを
くらふでめくぐくらくとまるがよし
かんぢく〳〵ハそれもくいね　こまも
くえぬとつますふさうくもくふれぬ
ぞやうがめうくハらかんどもへがき
ぞうとおもへまゝいつふもうんちが
いふでくつれこの山犬のがりしへ
ぐんむらふいちとでらんどもで
ぞうこふまでぜきせてこのまれ
さりそまがごとしさちぢく〳〵ハつぶ
けらいもぢつらくそぞでもさちら
ところふちられ◦ぞとこえむやんいのち
おくべつ◦ぞいふまづひあおやせの
かくつぞごのふぎうまでもつむが
よいところふえるまきをきさいて
うるびんふまづでんよりひぬおろ〳〵てゐう事ふ
坐ききゆいて「そうでこさやまぞくふつまべぢ
いふてぞよりやみつふもいつまいがあまりとりへべ
みさけあれ人ひらつわりそきとあかり⊠

よくみへんを
わどこそ
ゆのかり
これを
あかり
て
※
※けむり
をとまいふ
人のするこを
くとまれのここをうぞ
さまあれぞよいぶのも
ことどふかいとさくらふ
このつまらくの天へ
わりむいまこれまでさは
さつとふきであるでて
定ふいとめ山下がのかて
つ◦きつゆけまべ「つぎへ」



つゞき　あづよけまばかりそら　▲ふあづこにゆあいそーそかもくれば　「ごまてこまく　とてせんをこういたろう　げぎらを　どこゆえひとまろこの　まれうれて　ぜをひらきそぶりを　あろうんろうを　たろうあへうろく　ゑぐのま　十二ヶれちくぜの　まくげぎらゆ　あそふぜがらべた　まちいくぶれが　をころゆあくぜ　あんこらくまんの　このくをを　うろうふさろへゆ　うつと　いゆつべきと　ゐくぜ　いゆをきくろう　あふぶろ　うろびんら　ぎうをまりろ　「いろふゆい　あこゆまきぎ　ぎろろ▲　さろうけひきふりて　その利よつぶれが　ゑいぶくすれども　そちろのぞくえぐで　さくゑんりゑどんが　ゑぐうぎの法をろとびて　さんぜうふいもゆをと　ゑろるをやこれくろぜも　ゆんるすのけいごを　ぢきくゆめいぜ

▼二天の力士りき と

らくくとべとふいのち　をきろうかぐぞり　のりかるうぬとたい　むしのまぞうふ　かくつそ刀を千方ふ　こくちくくろうんるんぢくう　ふくろうぞ刀のゆびい　ふくゆまぐいひあげべくろ　ゆすくくとうれいかさぐと　ふのとくきてゆくんくすれば　「あんぞかくまぞかぐどゆ　くいそくとびるふうのちを　ちまんイぢあんまと　づいそゆもむくむくう　ようふくろうのかゆくい　ゆくそのくそゆのふ　ちひまくくまそ　ゆくぞくと　くるびんらい　ちぐくをを　ちのゆくんと　ゆくそけくぞも　そのせいくくふ　ゆびくにけれびゆう　ゆくのくくとかくくそ▲

▲うるびんらを

まるゆぞくさろい　ゐをのくくんど　けるびふのものくく　ゆくゆくのくちよう　ニツのひくそのゑ　ゆもくーグ山の中ぐんふ　あくくとんくうち☒

☒そのくみ　五丈あまりの▼

ちふ

ひきゆ

ゆをろ

考えるけるうちそのゆんゆ　ゆくをくゑのくんゆ　ゆくぐるまるゑ

次へ

應賀作
國貞画

あ

丹

つぎ　ひそうふいさいけ夫人ふかうゑんバ
ちうあくびゆつひの名をかり
ゑひて女のかごふやさまをゑより
どをあばわきいるちうしるさ
ふもちうのめもくさ
かくかれしやくうけ
いそぎごさんけ
あれとかうちう
ゑんびんをまやら
ことふまうこびゑひ
てまことふれれふこにてと
ありにあちうの名をうり
そのかごふやさせてひそうふくと
いでゑひわさそかもよう
わくうくハうのたくのごく
このごうひふちまのふちわあやせ
よりにカにうこめれのをたの
ゑにさすまばこのかごの
せきゆうざんちりむきーを
貧曽官紙そしふのの
ゑうけそいそぎわあやせの
くえつうぐうふちくびけうゑバ
わあやせんことふうゆうくうちぐち
せふうせそんふさぶうこさまそ
こちうのくうをうぐうれ

▲ゑうをまちうけて
ごちうようこのわうへ
のうのめごうぐいよ
いどのゑせーめふ
まうこうありと
いふくうくうふ
丹車いうこそ
いひけるゆう
「ゑのふとぐ
そのゆくを
これふつとゆさを
ゑくまぐて女れこバ
女ぐちうゑて利ありと
いふゆわあやせそまこそ
ようーんとゑバ丹車いそぎ
いふをあくあてふまんの

☒ふくえんのものを
ゑくびてびーき
のうりのをう
ちういぐさせて
それふのうて
いそぎく天心
ちのゑくと
いそぐせけう
かてまく
いくけ
夫人の
かくふくひて
こうるこの
ちくふくあれ
のものをちうを
ちけばけの
大ゆちう

「ゑくえくバやうんふゆちう
ゆうこをまえぐうて
どのゆのさとけぐうまと
ふをまちうけふまさ
女どもとつくひこうて
つくふもこうもん
えんかくうぐ
ちりもつくをき
たくこくえこれぞ
かりつくひこちる
かのをいまうの
ついゑちも
かをつくまた
ちもぐー
いこぎけの
つくひれ
ゆそうる
ゆうこを
ちうこの

▼女中どこのぐうをこうて
つくる
のの
あくふ
ゆくて
太子その
のこうぐうえと
丹車といふ
えんぎんの老
女をちもひけ
こさこうけ夫人
いこのけ夫人
ちもをつき
ゑひりその
あふかごをうぐ
これるバ

円
わ

び

つぎ
かくくと
うちうちこひて
「そうさ」

應賀作　國貞画

▲蘭桃の樂花を
あそさのおのみこのあんふるをめ
あんて天花をさいてうるふ
つぐせいろいさろうるくさろふ

つぐきさやあくんさこ
いさよとさこうるも
この美の女どもさく
あうこあおやせの
ぶそへろうとば
男どもいのふやもよぶ
よーとの
うくい
りもちふ
かけそも
きここの
きろうを
こさくぐさと
ゆいうふゆゆこ
とうしまみて
蘇蜜そうを
彩りいふまぜ
こまひしをさこうこ
うるあんヌふゆり
櫻路うのうちふ▲

☒ぐさうまりり
あくムデ女ども

☒うぶ
さあを
せよ
えんぶ
いまざ
ちゆもちぜ

とうびきのいろふうこを
ふくむそのこそもめぜ
ゆうなりける

屋敷雪ぶんま

四十四編

上下巻

万亭應賀著

歌川國貞画

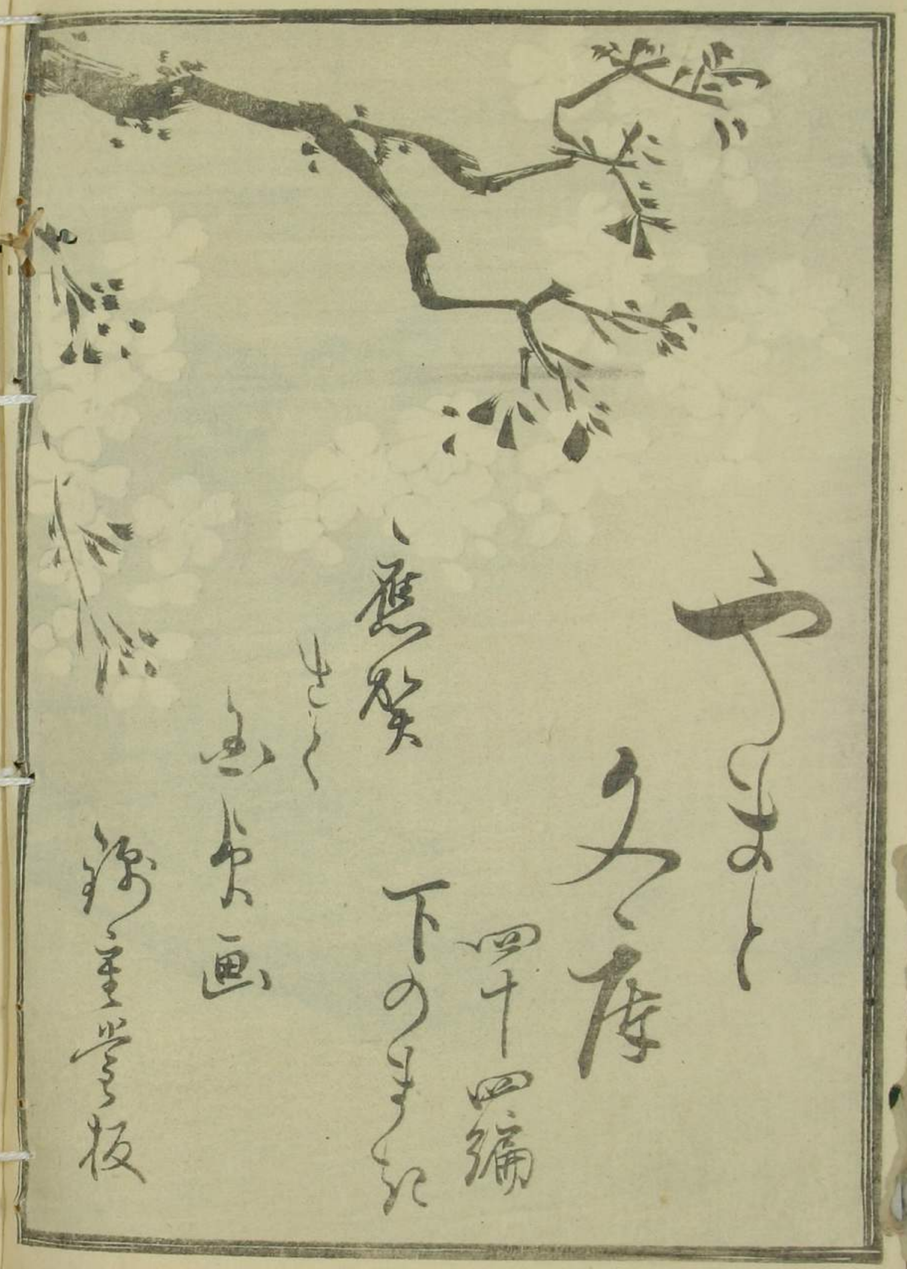
錦耳堂板

屋敷ぶんま

上方亭

國貞画

侍文庫四拾四編
錦重堂版
上
刀亭應賀作
歌川國貞画
作題世界図会
下



釋迦八相倭文庫四拾四編序

夫耶輸達羅女ハ大力ヲ以て出曜經第七ハ瞿夷を以て調達為夫人の文あり瞿夷ハ是耶輸陀羅女なり又六度集經第七ハ裘夷と号まく薩婆多論第二ハ佛在世の時ハ三人の多力ヲ以て一者阿難二者狗夷三者有二釋種子云云まく大毘婆沙論第三十に三人の釋種なり見ハ有鉢羅塞建提力二ハ阿難二ハ設摩釋子三ハ瞿波釋女とあり瞿波ハ則耶輸陀羅女也

皆安政己未季炑脱稿
仝　庚申　陽春發市

万亭應賀誌

韋提希夫人
逆子阿闍世の業に深宮より被閉居て遥に耆闍崛山を向つゝ持念在せば
世尊大目犍連

光明遍十方世界の佛を生取捨
及び阿難
世尊よ
今未て彼来淨土の法を投げ

耶破僧事第十の中畧
達多欲下
耶輸陀羅女
目連

我及稱王時
提婆達多法衣を
着て名を
天魔と号
夕陽山の
庵室ふ
尋来て耶輸
羅女の如
比丘尼を
奪ひ去る
耶輸陀
羅女
提婆
達多

目

丹
わ

月
わ
い

者

應賀作國貞画

つぎは　ちゝひを
うつるべ
そのやいさを
もつて
西臣り使いやぐて
まりぞきけを
どもうれいうりは
ゆすまぐ
つのふゆるこけ
夫人を

▲深宮読ふ
まぢこあつて
その日
より
ちゝこう
のゝえ
☒

☒かゝふ
とをを
かゝてきんぜ
らまてう

下のまたいのさまとてのやりふひひあ姫夫人　ぜんぜん
つてうまあよやうれあるやせきゆへごこんまこのの
おくあるさたエにゆうりうきよれあるふあるまヤイ
そこえまどあいるせあるあるあるみこい
このてくらをれとつのさたをこ
まるひまるたあるれいるたるれぎあう
まうとるるれけりまあるくさたるうひの
あるとまふるてりこうまるよあまれ
かるうるあまこのぐれうひ
のるまのあつきそひそこんぞ
のうるくぞうたのまける
さそこふふうぎのあのあり
あるくふ法沖　作のさまるれ
どもかるこさちをるくつめば
これとりくあるるぞこう
まるあうのんぜんより
ふりきこまぶこをるふを
うちふのるるくあるるや
せのこてんぎめるこるる
ぎう充ゆえるまりそ
あるやせけんちよ
ようのよ

▲ゆうごとをあくようこび
ふるのうちふあぐこあり
けるををうへぜんの
法沖さぐを
あくうりて☒

☒あまりやせくと
ふるこるふあるうきぎ
をまとこのふうより
まくくぐるみと
ちうこるふかつこあば
ヤアこまを
れとりぞ
ゆかうげんの
ひるれ
あくぐうと
ゆど
あまんの
るひ
さるぎ
さるみ
のまん
を
ゆすゆ
ゆるる
こるる
これを
こうう
ひそ
わるの
つぎは

せ
舎

今吉

舍
せ

あ

び

せ

舎
せ

い

万亭應賀作
歌川國貞画

大和文庫
四十六俳
應賀著
國貞画
錦堂板

万亭應賀著
倭文庫四拾五編
歌川國貞画
錦重堂版
上
下

申行集

倭文庫

四十五篇

下之巻

柳亭賀作

國貞画

錦重堂

寿梅

釋迦八相倭文庫四拾五編叙

夫摩鄧伽の女は由來い諸經ゐ在どゞ異訳ゐり〻すゑ已に摩鄧の女ゆゑのえ〻〻其名を云されど茲ゐ六ノ鄧室の名を設〻ゑ童女達ゐ讀覺安かゝ志ゑんゑの爲也猶提婆ゐ傳等い十誦律。增一阿含經。大涅槃經。毘奈耶破僧叀。大方便報恩經。五分律。大智度論。摩訶摩耶經。出曜經。拾ゝは外にも出たゞゝと皆異譚あれど經々は要文は摘で予手志ゐ盛素人の白胡麻をふゞかけく呉音も志〻ぬ語任の護魔穢いかゝひ草は志〻物ともゝ又あゝん叙

安政七稔

庚申初春畫

五万亭應賀誌

毘奈耶破僧事第十八に云

提婆達多語未生怨王曰我以教汝
今得王位今須建立令我作佛王語
曰佛身有金色汝身無金色何
令作佛耶復白王言我身作
金色斯亦可得即召金匠
言令我身作金色金匠
曰若能
忍
痛
即可
得作
即以熱油△
塗身
△
著金薄身
甚受辛苦

摩鄧伽の孃ゝ鄧蜜
阿難を懸想す

摩鄧女經云
時に阿難持鉢
乞食已阿難道
水邊行見一女人
在
水
辺
擔
水
云云

佛足縮圖

千輻輪相

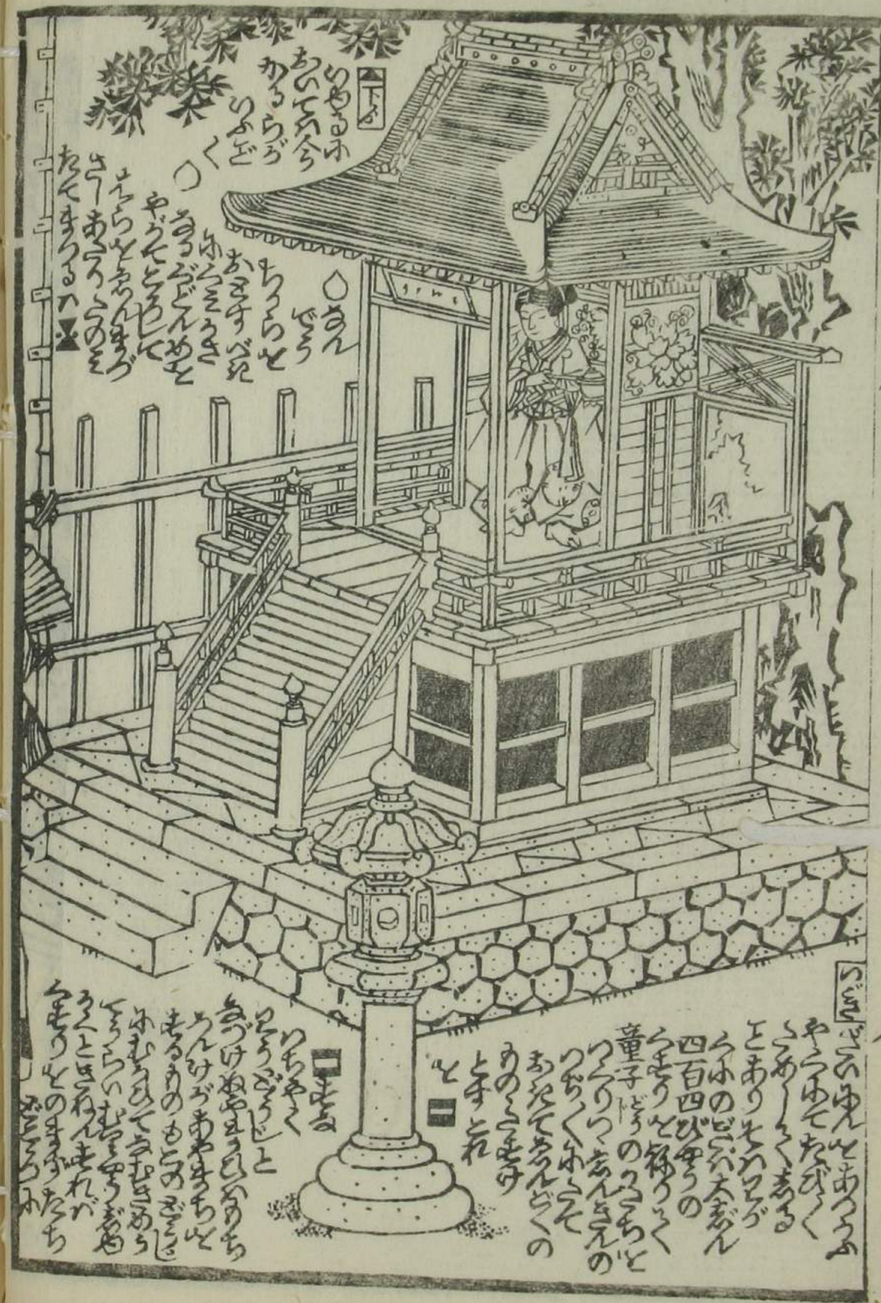
魚鱗相

金剛杵相

梵王頂相

耶

提



病平愈

奉納 藥王童子尊

奉納 疫病平愈

奉獻 南無飯倉頂彼

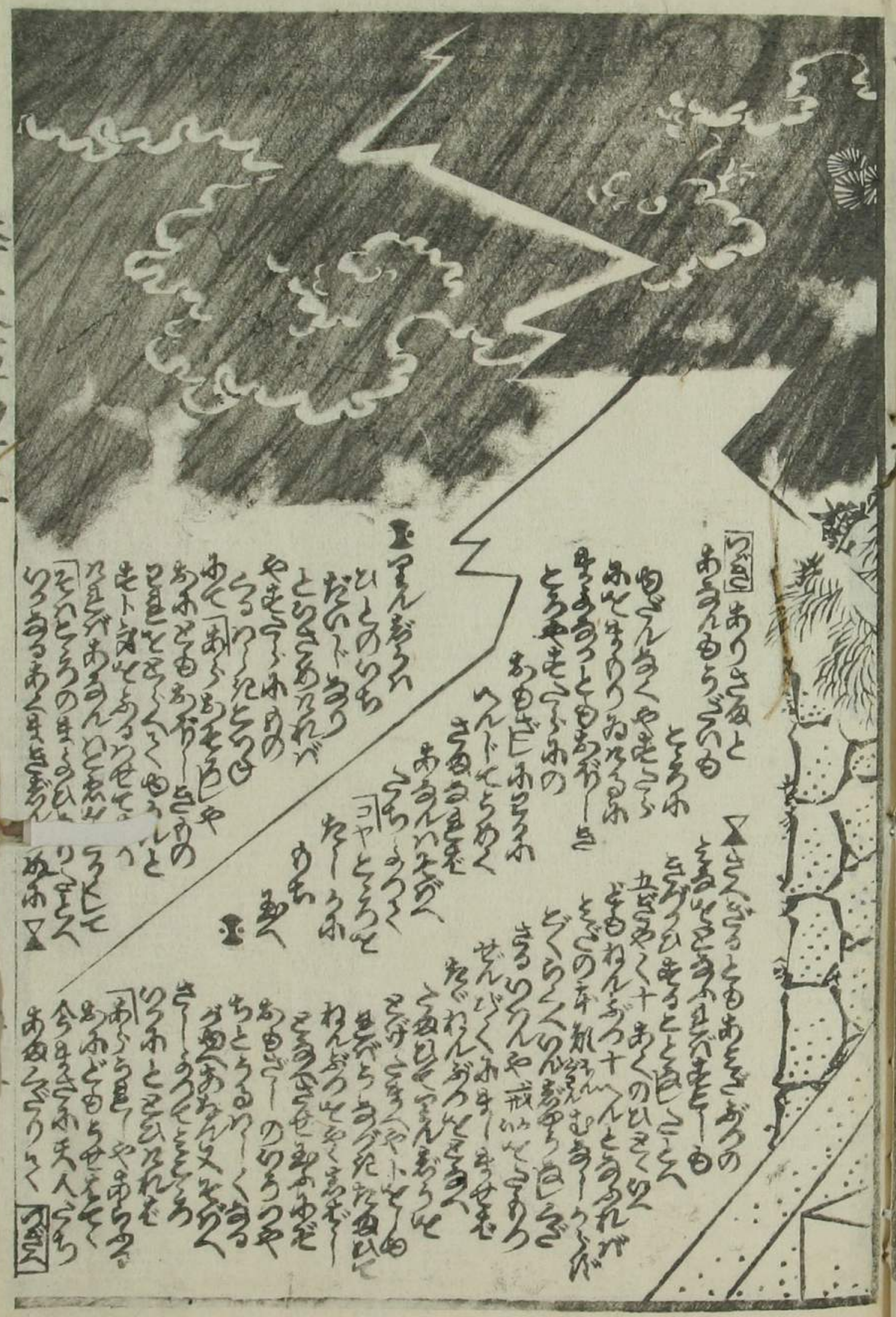
應賀作國貞画

三
教文庫四十五

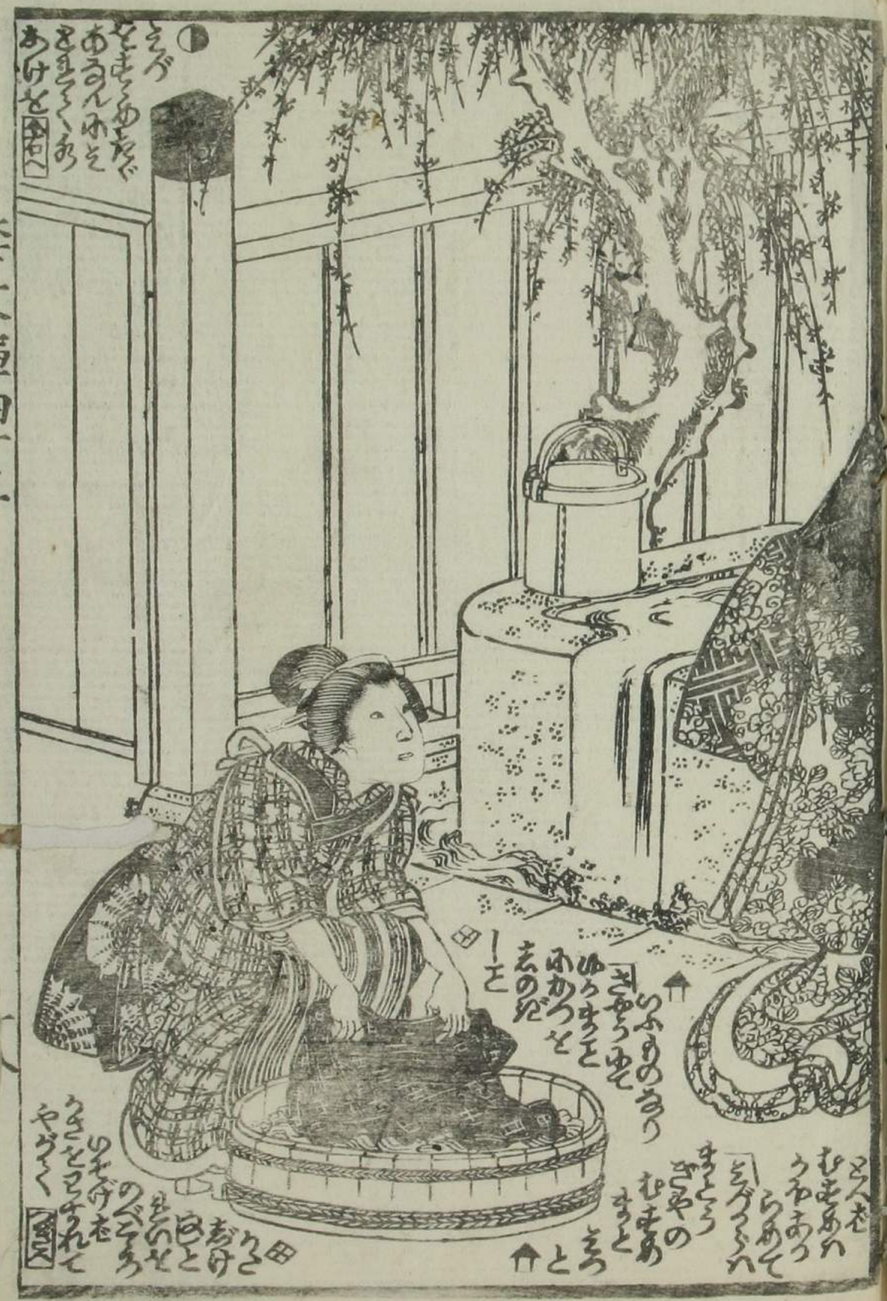
金

提

耶



妙
耶



やまと文庫
四十五編
上の巻
申の春
万亭應賀著
歌川國貞画
彩雲堂
壽梓

万亭應賀作
歌川國貞画
備書交來